

花

み

つ

花み

つ

いこくはつ申す
に及ばず一威光
は申すに及ばず
の誤なるべし
しうしんのきも
よく一主臣の義
もよくか

尊氏將軍の御時、既に一天下親子になり給ひしかば、尊氏都にこらへ難くして、筑紫を
さして落ちさせ給ふ所を、菊池大勢にて追かけ奉る。尊氏の御勢僅に一千餘騎には過ぎ
ざりし。されども御運いかめしく韃濱の合戦に打勝ち給ふ。其故は赤松の妙善律師則祐
といふ人、手を碎き合戦し、高名大きに勝れたり。されば赤松は播磨十六郡を賜はりて、
入國のいこくはつ申すに及ばず、一族若黨其數を知らず。こよに岡部といふ新參の者一
人はんべり器量骨柄人に勝れて文武二道のつはものなり。しうしんのきもよく心に相
叶へり。しかれば播磨西八郡を賜はつて、草木を靡かし給ひけるが、一人の子をもたずし
て、或時心に思ひけるは、申子をせばやと思ひ立ち、やがて女房は法華寺に参り、岡部は書
寫山に参籠申し、深く祈請を申しける。七日に満する夢に荅める花を一房賜はるに、青
き葉の風に散ると見て、夢はさめにけり。さては子を賜はらん事は疑ひなけれども、妾が

はかなくならんよと、思ひながらも下向する。岡部が見る夢にも盛なる花一枝賜はるとありければ、青き葉の風に散ると見る程に、われに子を賜はる事は疑ひなけれども、葉の散ると見る事の心もとなけれど、思ひながら下向する。程なく女房懷妊して産の紐をぞ解きにける。男子なりければ斜ならず喜うで、名をば花みつ殿とぞつけたりける。

かゝりける所に、赤松殿岡部を召して仰せけるは、われ三年三月の大番を仰せ下されたり、某上るべけれども、御邊某が苗字を名のりて御番勤めよとありければ、主の苗字を許さるゝ所面目これに過ぐべからずと、急ぎ都へ上り御番をうけとり、日數を送りゆく程に、傍輩の方より、暫く在京の程召使はれ候へとて、優なる女房を一人つかはしけり。心ざま人に勝れければ、岡部在京の程愛して比翼連理の思ひをなしければ、程なく子を一人まうけたり。比は九月十三夜の事なれば、月によそへて月光とぞ名づけける。

大番も過ぎければ、月光同じく母上を相具して下り、始めて家を作り、あたらし殿とぞ申しける。花みつが母にも劣らずもてなしけり。やうく月日を送りゆく程に、花みつ十歳になりける時、岡部思ふやう、赤松殿は久しくわが殿の御一族なれば、大殿久しくわが殿の奉公仕りけり、二人の者共を相具して其時ゆひがひなくふるまひたらん時は、主の

こ精好「こは
色濃く染めたる
をいふか

再遍―再度

恥、我家の恥ぞかし、思へば山寺へも上のぼせばやと思へども、よろづの事共案じける時、書
寫山へまゐらばやと思ひ、花みつをば輿こしに乗せて別當の御房へぞまゐりける。別當守護代
御上りとて座敷を飾り、寶物たからものを調へ待ちける程に、花みつの輿をば椽近くかよせければ、
別當も同宿も怪しく思ふ所に、年の齡十歳ばかりと見えたる兒ちこの色白く美しきが、色小
袖にこ精好の大口おほぐちたわくと著なし、薄化粧したるが輿の内より出で給ひければ、別當喜
びて、やがて坊中の兒達を請じ、座敷の體てい美々しく見えけり。盃三献に及びければ、少人せうじん
を初めとして打亂れ、既に酒盛さかもりになりければ、別當既に酩酊めいとうして、酒を飲み得ず。岡部
心に思ふやう、花みつを兒に請へかし、請はればこのまゝなりとも置くべきものと思
ひければ、別當に酒を強ひて、今一つ聞召せ、御所望の事御座候はど、何事にても承り候
へ、奉公申すべきといひければ、別當酒たふくとうけて、法師は別して何も所望にも
候はず、只今これに御座候ふ少人は、定めていづかたへも御約束候はんすれども、暫くの
間別當に御預け候へ、後見こうけん申したく候ふと仰せければ、岡部一往いちわうは辭退しけるが、再遍さいへん
に及びければ、子細なしと領承しけり。別當餘りの嬉しさに三盃飲みて、花みつ殿に思
ひざして、其盃しうちやくを祝著して、われ又飲みて岡部にさしけり。色々の藝能をつくして、既

本臺一本妻

に酒盛も過ぎければ、岡部花みつを呼びて、汝はこのまゝこれに在るべしとて、若黨小厮を相添へて置きけり。さる程に岡部下向して思ひけるは、今は月みつもいかに羨しく思ふらんとて、吉日をえらみて同じ坊へぞ上せける。さる程にこの兒達は成人するに随つて、容顏人に勝れ、芙蓉のまなじり鮮かに、青黛の眉うるはしく、丹花の唇うつくしく、翡翠の髪ざし、誠に以て濃かなり。見る人は申すに及ばず、聞き傳へし人も心を懸けずといふ事なし。されば情も色深く、心ざまも正しくしてたぐひなし。書寫は三百坊と申せども、一千餘人の老若おしなべて此兒に心を寄せざるはなし。さる程に花みつ殿の母上は本臺にてまします上は、四季に従つて衣装色々をつくして、折節の雜餉何に乏しき事はなし。月光殿の母上はいまだ何事も心にまかせざる事なれば、引きかへたる氣色なりければ、人の心のうたてさは皆花みつ殿にぞ靡きける。花みつ殿十四と申せし春の比、母上生死無常のならひなれば、既に危く見え給へば、花みつを近づけて、われともかくにもなるならば、定めてあたらし殿此家に移り給ひて、月光を世に立てらるべし、さやうになるとも相構へて威勢争ふべからず、只汝は思ひ切つて法師になつて妾が後の世をとぶらはど、誠の孝子と思ふべしとゆひ含め、遂に空しくなりにけり。

ゆひ含めーちひ含めの誼

つぎなる小袖―
上等ならぬ小袖

こし―御師か尚
考ふべし

譏奏―譏訴の轉
訛

案の如く月光殿の母上は本の家に移りて、よろづ思ふやうなり。かよりける所に京都又
亂れ天下亂世となりしかば、國土の軍兵共京へ上りければ、赤松殿も上洛あり、岡部も
御供申して上りけり。多くの日數積りしかば、繼子繼母の事なれば、花みつの方へは月
に一度も何事かありとだにも問はず、たま／＼小袖風情の物を仕立てて上する時も、つ
ぎなる小袖をのほせけり。月光殿の方へはよき小袖を數をつくして上せけり。これは坊
主の御方へ、これはこしの御方へとて、雜餉かまへ送りけり。人の心のつたなさは皆月光
殿と賞翫す。されば花みつ殿は何事につきてもよろづ物あぢきなくして、一日二日と過
ぎ給ふ。岡部都より下りけるに、女房語りけるは、花みつ殿は坊主の御方より暫くの間
不興あるべしと語りければ、岡部思ふやう、繼子繼母の事なれば、空言にてもあるらん
と思へども、まづ／＼女の心を破らじと思へば、寺へ人を遣して、月光がかたへ文を上
せていふやうは、急ぎ此使と下るべし、花みつには思ふ子細あり、此方より申さん時に
下るべしとありければ、花みつ殿我こそ兄なれば、まづ文をも賜はりて下るべきに、月
光が方へ御文ありて下さるゝに、なんぞ怨しや、仰せごとのうたてさよと言ひければ、月
光申すやうは、定めて母の譏奏にてや候ふらんとて、打ち涙ぐみいへば、花みつ殿にもさ、

上りたれば―上
りたらばの意

疾くして―早く

一二と―一こと
の誤なるべし

は候はじ、もしさもあらばよきやうに申させ給へ、やがて某も下りたく候ふ、下らせ給へば心安くて候ふとて、うち涙ぐみて、さすが人目も恥しければ、露に爭ふ袖の上、打添ふ母の面影の今更いと戀しくて、わが住む部屋に歸りつゝ、さめぐと泣きければ、餘所の袖までもあはれにて、皆感涙を流しけり。月光も兄の心となさに、泣くく里へぞ下りける。岡部は月光が成人したるを見るにつけても、花みつかくこそあるらん、猶も大人しくぞあるらん、彼の母の草の蔭にても、不興といふ事をさこそうたてく思すらん、所詮寺へ上りたれば、定めて事の様は知るべし、別當に大方の事にて言ひ許して見せんずるものと思ひて、やがて月光を打連れて上りけり。別當いであひ、雑餉とりはやし、自餘の兒達も座敷に直られけれども、花みつ殿はさしいづる事なし。別當花みつに仰せけるは、機嫌を窺ひ御身の事を申し許しまゐらせんと言ひ慰めてありけり。岡部所詮只今急ぎて上るも只我子のゆかしきにこそあれ、疾くして別當の此事ゆいだして許せとあれかし、思ふ事なくて酒をのみて歸らんと思へども、別當も心中に此事をのみ思ひけれども、岡部殿の機嫌打解けぬ體を見、心をとりかねてゆい出ださざりけり。

岡部思ひけるは、無慚や此子は別當の氣にも誠にちがひけるぞ、此者の事を一二とゆひ

いだされざる事よと思へば、酒も心にそまずして、座敷を立ちければ、花みつは父の戀しさに鰭板はたいたのすきより次第に見送りて見れば、岡部も涙ぐみて、無慚や此子われらを戀しと思へばこそ、彼所かしこの蔭かげよりもや覗きて見るらんと、こよかしこのすきより見る程に、鰭板はたいたのすきより目と目と見合せけり。岡部さればこそ此子よと思へども、何といふべき様ようもなければ、さながらにて歸れば、兒遙かに見送りて、稍久しく立ちて、遂に泣くく部屋へ歸りて、つく／＼案じて思ひ給ふやうは、われは父の不興のみならず、坊主の御心にもちがひ、憎まれまるらせてありけるものを、たとひ我親は人のゆひなしにより不興との給ふとも、坊主だにとりもちて御詫言あらんに、などか許されざるべけれども、坊主の御氣にちがひ申すによりてこそ、是程にうたてしくあるらめと思ひ入りければ、われは今は母親はなし、父親ちちおやはあれども不興ふきやうの咎とがを蒙りて、師匠にも憎まれぬる上は、うき世にありても何かせん、ともかくにもなるより外ほかはと思ひ、召使ふまつわう丸を呼びて、大ふしよう二人のこしの方へ此夜この月の面白さに社に参り申し、面々諸共に月を眺めて、御心をも慰めばやと思ひ立ちてとの給へば、二人同じく、易き事といふまゝに、二人が一人は前に、一人はうしろに立ち、まつわう丸を引具して、如意輪堂にまゐりけり。

茅店云々―温庭
筠の雞聲茅店
月、人跡板橋霜
の句に據る
言語道斷―言語
にいひ得ぬ程上
き景色なるとの
意

御里の様の事は
―御實家の例の
一件の事は

いかゞとし給ひ
しが―色々とい
たはりしが
面々様―あなた

○以下下巻

背くべきと―と
の字不要なるべ

折節人もなかりしに、比は八月十五夜中の事なれば、茅店^{はうてん}まさに明かにして、板橋^{はんけう}おのづから靜かに、松風^{まつかぜ}颯々と吹いて谷川の聲りん／＼と響きけるは、言語道斷の次第なり。皆諸共に心を澄まして、いと信心に念誦^{ねんじゆ}し、その後はこし方行く末の物語どもまで言ひいだして、涙を流し、假令^{けりやう}月影も兒の袂に浮ぶ程に見えければ、二人の法師怪しく思ひて、兒の心を慰めんとて、何事にても候へ、われ／＼かくて候ふ上は御心安く思召せ、心を殘さず承り候へ、御里の様の事は、今一旦の人の申しなしにてぞ候ふらん、やがて思し直^{なほ}さるべし、其外は何事をか御心にかけてさせ給ふべき、いかやうの御事なりとも、我等に深く御心を殘させ給ふなと申せば、兒も暫く打案じて、今は何をか包むべき、母にて候ひし人世にありし時は、坊主も人々もわれ／＼をいかゞとし給ひしが、今此頃は人々の心も變り候ふ、面々様ばかりこそ、われらを不便と思召し候へ、そののみ御嬉しく候ふ情^{なさけ}にて候ふとて、かきくどきの給へば、二人諸共に袖をぬらしけり。

稍久しくありて、所詮面々に申したき事候ふ、聞召し入れ候はど申すべし、一大事の事にて候ふといへば、何事をか仰せを背くべきと一命をすつる事にても候へ、露塵^{つゆちり}とや思ひ候ふべきと、誠に思ひ入つたる體^{てい}に申せば、さては嬉しく候ふ、誠の御志とはかやう

たとへば一實を
申せばの意
討つて賜はり候
へと一との字不
要なるべし
これはよもと一
これは決して口
外せじと

一定一きつと

思ひ切りて一決
心して
領承し一領承す
の符
よしそれも云々
二人の語

の御事を申し候へと、ねんごろに喜びて、たとへば弟の月光おと討つて賜はり候へと、これこそ一大事の御ようとは申し候へといへば、二人返事に及び難く、赤面してあり。兒さればこそこれはよもと思ひつるものを、心易くゆひいだしたるくちをしさよ、此事漏れて聞ゆるならば、坊主にも里にもさこそあらめ、今はなかの坊へも歸るまじといへば、とかくする程に、夜も更けゆき候ふに、皆々御歸り候へ、御名残をしくは候へども、とても長らへて添ひはて申すべき身とも思ひ候はねば、われはこれよりいつくの浪曲うらわの末山の奥までも、身をすごし候ふべき、さすが棄て難き命にて候へ、長らへて候はど互に見え申すべし、もし露の身のならひにて、消えぬと聞召し候はど、後の世を頼み入り候ふといへば、此兒は一定自害をすべき、さなしとて此人を失ふべきにあらず、火に入るも水に入るも、前世の因果なり、二人の兒をばいづれとも思はねども、そも此兒を無體むたいに失はんより、彼の月光をこそとにもかくにもなし参らせんとて同心し思ひ切りて、さらば子細なしと領承し、花みつ殿涙を流し、さこそ面々不得心に思召し候はん、御心中ども恥ぢ入り候ふ。よしそれも今はいらぬ事なり、さてもいつといへば、兒は我所へ十六日に定めて來り候はん時、われ聲もせずしてゐる候ふべし、歸り候はん所を討たせ給ひ候

夜こめて―夜中
に

へといへば、子細なしと領承す。さらばとて皆々夜こめて歸りけり。二人の法師は一所にゐて、さてもうき世のならひとて、かゝる憂き目を見ん事よ、さりながら力なし、後の世をこそとぶらひ申すべけれどぞ言ひける。兒はわがやに歸りけり。露消えん花の朝顔いつまでと、はかなき命ありあけの、月も傾く名残にて、月日を待つこそ悲しけれ。

さる程に十六日の暮方に入相の鐘もつくく鳴り、月影も山の端に忍びて出でもやらざるに、二人の法師は用意して、わざと具足は著ず、打刀ばかりにて、花みつ殿の局の前に立つ。花みつ殿は月光殿の姿に身をなして、暫く叩き給ひければ、内より聲もせざりければ、餘所へ御いでかと、獨言をいひ歸り給ふ所を、大ふは餘りの悲しさに走りより、足をむんずと抱きつく。しょうは思ひ切らではとて、肘のかよりを二刀さしてすて奉る。二人の者泣くく歸りて、さてもくわれは情なき事をしたるものかな、法師の身にて兒を殺害する事は例なき次第なり、但し後の世をとぶらひ申すべしとて、泣き悲む所に、こはいかにしつる事ぞや、花みつ殿を今宵人の殺したるぞとて、上下騒ぎければ、二人の法師これを聞き、見まがひてぞあるらんと思ひながら、行きて見れば花みつ殿なり。さては此兒にたばかられてこそとて、二つともなし、自害するより外はなしと思ひ切りて、

二つともなし
他の方法をし

これ又たうな
なり—これ又た
だなくばかりな
りの誤脱か

失はんめ—失は
めの音便

きやうをし—孝
養しの誤なるべ
し

二人の法師は今は何をか隠し申すべき、花みつ殿をば我等二人が殺し申すなり、いつぞ
やの頃本堂にて我等を頼み給ふやうは、弟の月光を害してくれよ、其子細は餘りに母の
うたてしく我に當り給ひ候ふ事の憎ければ、子を殺して思ひ知らせんとありければ、か
く仕り候ふといへば、別當何事かわが心中に變り候ふべき、さこそく思はせ給ふらん、
此老僧をさへ打棄て給ひ、自害をし給ひ候はど、悲みの中の悲みを、何となれとか思ひ
給ひしやらん、今はたゞいかにも共々に此人をとぶらひ申すべけれどとの給へば、これ又
たゝなかなり。

かゝりける所に月光殿、此事は面々の道理なり、花みつ殿とわれと比ぶれば、月光をこ
そ失はんめと思召し候ふ心中御ことわりなり、我におきては更に怨みとも思ひ候はず、今
は只われらも共々にいかやうにもとぶらひ申すべしと、泣くくゝの給へば、これ又理を
わけての給ふものかなとて、自害をばやみぬ。只一筋にきやうをしたてまつりて、その
後發心修行をも仕り候ふべけれどと思ひ直し、二人の法師別當ともに死骸をとり、孝養せん
としける。泣くくゝ別當申されけるは、此兒十歳といひしとき親父に請ひ申し、十六歳
の今に至るまで露おろかなく育て奉るに、かやうに憂き目を見せ給ふ事の悲しさよと歎

き給へば、一山さんの老若は申すに及ばず、賤しき者までも皆感涙を流しけり。さる程に文ぶんども數多あり、一の文は坊主の御方へとあり、見れば幼少の時より今まで人となされまゐらせ候へば、朝夕御手あさゆふをも引きまゐらせ候ふと思ひ、又後の世をもとぶらひ申さんと思ひて候ひしかど、かやうにことの外なる有様、誠に生々世々しやうくせの御うらみとこそ思ひ候へとて、二首の歌あり。

花はちり跡はさびしくなりぬればしもうらめしき心こそすれ
さこそなほ月をぞ人のもてあそぶ花はあだなる物と思へば
又一つの文は大ふしょう殿へとて、さても御手にかよりかやうになり候ふ事、後の世をば頼み入り候ふとて、二首の歌あり。

久方のあま照る月に名をとめて散る花みつとたれか言はまし
二つあらば一つの命のこしおき君がなさけを思ひ知らばや
又一つの文は月光殿へとあり、又もなき兄弟あにおとこにかやうになりゆき候へば、さこそ思はせ給ふらんと、そのみ心にかより候ふとて、一首の歌あり。

花の雲風に散りなば月ひとり残らん世こそ羨しけれ

又一つの文御父の方へとあり、言葉はなくて歌ばかり、

をしまれぬ身は山陰のさくら花散るともたれか哀とは見ん

かやうに書きおかせ給ひける程に、此由を里へ告ぐる程に、岡部さればこそ不思議の事いできけると思ひて、急ぎ寺へ上りければ、是非の次第なか／＼言葉に及ばざりければ、孝養けうやう營み、空しき野邊の夕煙となし、月光、大ふ、しょう殿、まつわう丸ともに行きがた知らずなりにけり。別當も又うき世にありても何かせんとて、ある山深く閉ぢこもり、行ひ澄ましておはしけり。さる程に岡部も花みつには死して別れ、月光には生きて別れ、彼是せん方もなければ、髻もみぢりを切りて猶も子どもの行末の悲しさに、別當の住み給ひける山の奥を尋ねゆきて、花を摘み香を焚き薪を採り水を汲み、亡者の菩提をとぶらひけるは、現世けんせ後生の然るべき善知識とぞおほえける。

月光、大ふ、しょう、まつわう丸四人の人々は、高野山へ上り奥の院近く閉ぢこもり、難行苦行してむにんの御あとをとぶらひけるこそやさしけれ。昔より今に至るまで繼子まごこ繼母ははほどなたてしき事はなしと言ひ傳へたり。さりながら順縁逆縁皆佛菩薩の御方便なれば、此人々の發心修行しけるも、誠に頼もしく有難くこそ思ひはんべりけれ。

むにん―無き人の音讀なるべし

